

『淫らな男子寮～新入生は男たちに狙われて～』

著：八条ことこ

ill：ずんだ餅粉

「やあ。おかえり砂川。随分と長居してたな」

考え事に沈んでいたせいで、急に近くで聞こえた声に悠真はまともに驚いた。

「え！？ あ、ああ、大槻先輩……」

暖簾をめくってブースに入りかけていた大槻の姿に、悠真はぎくりと身を強張らせる。

久住と並ぶ長身に、黒々とした髪の大槻は、体格の良さも相俟って、出口を塞がれてしまうとかかなりの圧迫感がある。

不自然な反応をしてしまっただろうか。――不安を瞳に宿しながら、彼は鞆を手繰り寄せた。

「昨夜遅くまでゴソゴソしてたから眠いんじゃないのか？」

「な、……んのことです？ 寝返りとかじゃ」

大槻は、悠真の苦しい言い訳を一笑に付した。

「ふうん。誤魔化せると思ってるのか。盗み聞きするつもりもなかったのに鼻息が荒いのが聞こえていたよ。久住さんに惚れてるんだらう？」

「どうして――」

聞こえてしまっていたのか。嘘だろう、と思考が停止して、言い訳を思いつく余地もなく悠真はうなだれた。

罵倒が飛んでくると予想しての諦念のポーズだったが、しばらく待ってみても、しかし大槻の反応はない。

不審に思って彼が顔を上げてみると、先程までは仁王立ちしているように見えた大槻は、困惑の表情を浮かべていた。

「……マジかよ」

――カマをかけられていたんだ。

大失敗を理解して、悠真は血の気が引くのを感じた。

「そんなのじゃない、です。僕は」

「声は、俺は聞いてないよ。鼻息なんか聞こえるわけないだろう。気配を感じただけだ。俺はただ、お前のゴミ箱の中身を見ただけだ」

言い訳めいていた大槻の言葉は、途中から恐ろしく変質した。

「見たんですか！？ いえ、そうじゃなくて、男なら誰でも処理ぐらいしますよ！」

処理済みのティッシュを確認されるなどという恥辱は、いまだかつて受けたことがなかった。当然だ。

だというのに、悠真の頭の中に響いたのは、露出趣味というフレーズだった。

入寮パーティーの挨拶の言葉に悩む彼に、久住が冗談めかして掛けてきた言葉。

それを事実だと肯定するかのように、性欲の痕跡を晒しもののように扱われたことで、悠真の身体は

軽く興奮し始めていた。

落ち着かない。いっそベッドに寝転がって、邪魔な服を取り払ってしまいたい。ここに大槻がいなければ――

「じゃあ今度俺にも見抜きさせてよ。砂川。寝顔じゃなくて、起きてるときに」

「見抜き、って……どうして僕に」

知らない言い回しだったが、スラングに詳しくない悠真にも意味はすぐに飲み込めた。かっとな顔が熱くなる。全部、バレている。

「だって砂川、顔つるつるしてて子供相手みたいでそそるし、俺は男も女も両方大好きだから」

恋愛感情とはかけ離れた大槻の言い分に、悠真は顔を曇らせた。言いがかりに過ぎないのだろうが、こんな倫理観の男が久住の同室にいることに、強い不安が首を擡げる。

「……大槻先輩は彼女いるでしょう？」

「いないよ」

「でも学内で女の子と一緒に――」

「ああ、それはセフレだから気兼ねしなくていい」

お互いに割り切った関係だ、と断言されて、悠真は反論に迷った。本題は大槻の交際関係ではないし、彼の口出しする領分ではない。

「いい、とかそういう問題じゃなくて……」

ただ、上手い言い訳が浮かんでこない。

なにしろ、当事者として性的な話をするのは初めてで、まさか同室の先輩に欲情の対象だと断言されるとは想像もしなかった。

「付き合おうって言ってるんじゃないんだ。まあ、コナかけてるだけで、実を言うと男同士で本番をやったことはないし。……お前だって、経験はなくても久住先輩で抜いたんだから分かるだろ？」

飄々とした大槻の口調は悪びれる様子もなく、彼にとってセックスのハードルが低いことを思い知らされる。

「僕は、……他の人に、興味はないです」

どうしてこんな不確かな気分のまま、動き始めて間もない感情を吐露するハメになったのか、悠真は目の前にいる人を逆恨みしそうだった。

「でも、久住先輩は男に興味ないと思うぜ。あの人、そういうところは健全だから。――昨夜のことを知ったらどう思うかな」

脅迫してくる大槻は、陽気な笑顔を浮かべている。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>